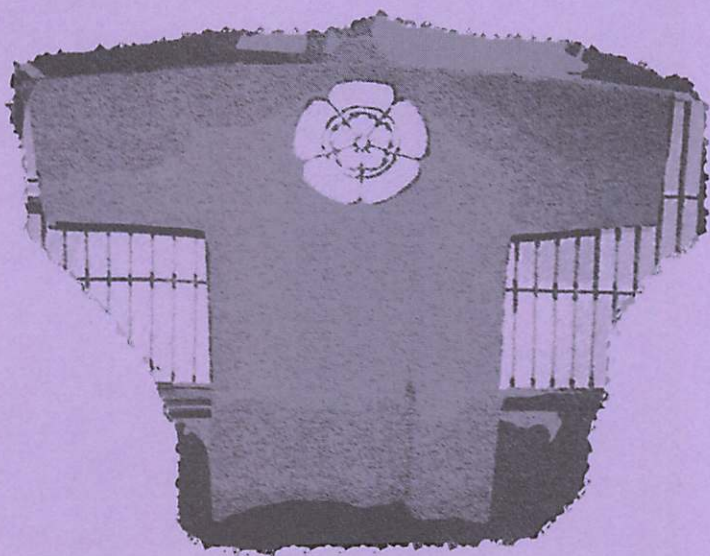


老舗の街・尾張町シリーズ27

尾張町を支えた女たち その拾陸

親子三代の商いは、飽きないの道のり



目 次

はじめに	1
雪道をソリで嫁いで	3
明治の姑、大正の夫、昭和の嫁の立場	4
街の中なのに広い庭があり、人と自然が一緒	6
してあげる職人さんに、させてもらう気持ちで	7
お客様のため人様のためっていうけど、私のためがない寂しさ	8
給料は神棚に、仏壇の拭き掃除は毎日	10
店と家、それに蔵を駆け回る掃除	12
職人さんのこだわり	12
人様へのお世話の中から	14
謝ることのない夫	14
孫の帰る日	16
孫を見守り	18
あとがき	21

はじめに

人前で挨拶をする折、腕を後ろで組む人、真っ直ぐに降ろす人、前で合わせる人がいます。どれが良いとかの問題よりも、TPOにもよるところが多いと思いますが、商売人の場合は、やはり腕は前へ持って行く人が多いようです。これは「自分がまず...」と捕らえるか、「人様(お客様)のお陰で...」と捕らえるかの違いが姿勢に顕れて来るのだと思います。

ここには、その場限りでない、「これまでも、これからお客様のために」という継続の姿勢があります。ちょっとくらい売上げが下がったからといって、合理的にさっさと店を畳んでしまって、アフターサービスなんて知らない！なんて姿勢は間違ってもありません。まさに、「商い」を飽きずに続ける気概が溢れています。例え、今すぐ報われなくても、“人様のためにを第一に”商売していればいつかは。もしも自分の代で報われなくても子孫の代でも.....いつかは。一見、このスピード時代に気の遠くなるような、あるいは非合理的な考えのように感じられるかもしれませんが、これが老舗を創り上げているのだと、少なくとも尾張町で商いする者は信じたいのです。

かつて、「尾張町を支えた女シリーズ」の最初の媪(おうな)から、「店先で掃除をするときは、ほうきを往来へ向けて掃いてはいかん。ほうきを手前のチリトリの方に向けて掃くんや、そうすればお客さんにゴミを掛ける粗相も起こらんし」と聞かされたのも、自分よりも先に人様のことを考える商いのこころ遣いなのでしょう。

一方、商品を仕入れ、お客様に買ってもらう。そのことだけを物理的に捕らえれば、合理的に、よりやすく仕入れ、よりやすく販売することにつながります。いわゆる“エブリディ・ロープライス(毎日が安売り)”ということに集約され、アメリカの巨大ショッピングセンターのウォルマートや、日本の一部の大型スーパーセンターの姿に行き着いてしまいます。確かにそれはそれで価値のあることなのでしょう。一見すると地域の消費社会に貢献しているようにも見えますし。

でも、そこにはどんなに論理的な美辞麗句を並べても、何かが足りないような

気がしてしようがありません。その場限り！といっても良いのでしょうか、潤いが感じられないというのか、あるいは余韻が残らないとでもいうのでしょうか。「ほら、こんなに安く、よりどりみどりの商品を揃えていますよ」と見えますが、客は「まあ、目の前に、とりあえず安いものがあるから買っておこう……けれど、もっと新しくて、もっと安い店が出来たらそちらへ行くようになるだろう」と思いながら買う、何か刹那的に流れてしまいそうなのです。

人様のためお客様のため、ということは何も安売りだけではない、と考えたいのです。いってみれば“エブリディ・サンクス(毎日がお客様のために)”のこころ掛けなのです。決してその場限りでないサービスを続けることを商いの姿勢とする。例えば店の規模は小さくても、こころ粋は大きく、こころ遣いは広く持つことを忘れない。そしてそんな店には、主人を陰で支える女将さんの姿がしっかりと見えて来るのです。ほのぼのとした暖かみを伴いながら。ここには本当の意味での地域とのふれあいが保ち続けられているはず。

何より、しっかりものの女将さんがいる店は、陰ひなたのない正直な商売をしているから、信用はかつちり守っています。ともすれば儲けることに先走り、いかにげんな商品をお客様にお世話することだけは絶対にしないことこそが一番大事だと信じているのです。

雪道をソリで嫁いで

「エイヤサア～」の掛け声と共に瓢箪町の実家からソリが動き出した。降り積もった雪が、屋根より高くなって一面に真っ白になり、道行く人が妙に浮かび上がっていた昭和22年2月22日。静かなソリの滑る音と対称的に、従姉弟たちの元気の良いハアッハアッと吐く白い息の音が大きく聞こえるようやった。

親戚中が子だくさんで、また皆んな元気やったもんで、兄弟や親戚を集めるとこの頃のちょっとした学校のクラス並の人数になる。今でも毎年、従兄弟会をしてるけど、すぐに10人や20人になる。あんまり数が多いもので、親も大変やったんか養子に行った兄弟もいて、姓はもうテンデンバラバラの賑やかさなんやけど、その時は古巣へ戻ったみたいで懐かしく、楽しくなるわ。

本当は、歩いてもたいしたことない距離やったんやけど、そんな皆んながせっかくの結婚式なんやから、と言って手伝ってくれたのが嬉しかった。威勢よく尾張町の店にソリを滑り込ませると、おめでたい日やからと従兄弟たちに何かを配っていたようやったけど、私はそれどころやない気持ちやった。後から聞いたら、ご祝儀のお金やったとかで、生まれて初めてもらった従兄弟なんか、今でもそれを語り草にしているくらい。

玄関に一步踏み込む自分の足を眺めながら、ここが新しい一生の場所なんやと、しみじみとところに言って聞かせたわ。商売を手伝うことなんか辛くない。朝の早い、冷たい水仕事をする豆腐屋の娘として手伝って来たのやから、取り立ててどうのこうのやない。けど、尾張町の大通りの店では、いったいどんなことがあるんやろう。知らんことだらけでちょっと不安になる。父や母は、娘が尾張町という老舗が並ぶ街の店へ嫁に行けたと、大喜びしてるというものの。

店の左側にずっと奥まで続いている土間の、湿っぽく塩で濡れて固められた通り庭をしずしずと歩いて行くと、大姑さんや、舅さん姑さんが笑顔で出迎えてくれている。この人たちが、これからの新しい親になるんや。と思う気持ちはあるんやけど、どんな顔なのかゆっくり見ておられないし、実際に顔を上げてジロジロ眺める時でもない。仏間に入る前に、実家の親が用意してくれてあった、花嫁

のれんが、もう目の前。

何か他人事のように、いろんなことが次々と周りで進んで行く。自分のことなのに、自分ではどうしようもないもどかしさというんかしら。いっそ、人ごとやと思いつければ楽なんやろうけど。端から見る、きれいなお嫁さん姿とは違って、当の本人には華やかさを味わうどころではなかった。

明治の姑、大正の夫、昭和の嫁の立場

嫁に入って最初に驚いたのは、ここは群を抜く商売屋ということ。人前を気にした華美よりも質素儉約を第一義にしているんだけれど、本当にそこまでするの...！格好の良い悪いなんてことは、考える前の世界。

昭和22年の戦争が終わったばかりで、陸軍自動車部隊の将校あがりのキビキビしすぎる夫のことやから、多少の質実剛健さは思っていたのやけれど。

親戚筋へ結婚の挨拶に行くことになった時、きちんと島田に結って着物を着るようにいわれると、そこは女の身、何か浮き浮きして来る気持ちは拒めないもの。軍隊で鍛えられたビシッと背筋を伸ばして歩く夫の姿に、ちょっと惚れ惚れしたり。そそくさと数歩後を歩いて行くと、

「えっ、車に乗らずにどこまで行くの」

夫はどんどん歩き続け、国鉄金沢駅の隣にある浅電(北陸鉄道浅野川電車)まで、どんどん歩き続けてしまう。ともかくも付いて来た私に

「大事な親戚筋だから、今日は電車で行く」

と、さっさと電車に乗ってしまう。

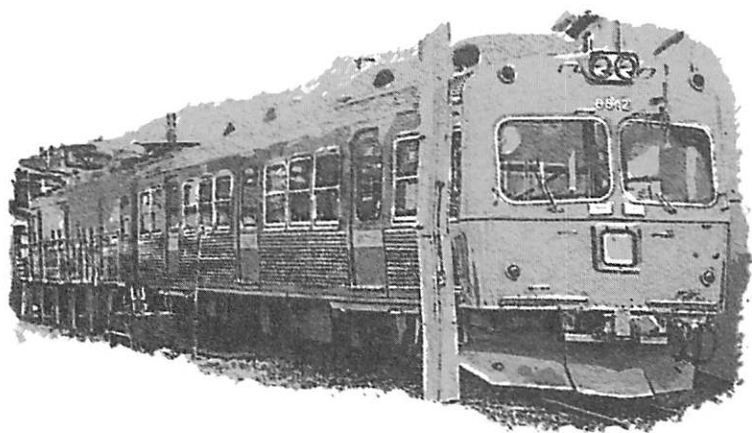
仕方なく一緒に電車に乗るものの、周りじゅうから、お嫁さんや、お嫁さんや、という具合にじろじろ見られて、どうしようもない気持ちにさせられてしまうた。けど、夫はそれがなんだ、別にどうともない様子をしている。

挨拶に訪れた先鋒の親戚筋の人が

「こんな遠い所なのに、電車に乗って、駅から歩いて来られて申し訳ありませんね」

逆に謝られる始末。

そうした挨拶の言葉の端から...『でも、この姿でよくもまあ電車に乗って来ることが出来たの...』と、何か呆れられているような視線を感じるのは私だけなのかしら。



ようやく挨拶回りを終えて帰ると、なんでそんなに時間がかかったの。とでもいうように、姑さんが仕事をどさんつと用意してある。一休みさせるなんて思いもよらぬらしい。というか、仕事もせずに挨拶回りして充分休んでこれたはずや、この上まだ仕事もせずにおられるはずがないやろう。嫁に来ることは、お客さんに来ることではないんやし、との気持ちが込められていいるように感じられた。

実家が豆腐屋で、朝早くから手伝っていたもんで多少のことならと思っていたのに、まだまだ甘かったと思わされる。でも、こんなことで負けてたまるか、何くそ！私はそんなに柔ではないのよ。昭和生まれとって馬鹿にしないで。

街の中なのに広い庭があり、人と自然が一緒

一通り婚礼後の挨拶が終わって日常生活が始まると、いろんなことに気づく。まずこの店で一番大事なのは、年輪を刻んでいるお舅さんやお姑さんであって、若い者は問題外の感じになっていること。何も分からない者は、言われたとおりに体を動かしていればいい！

挨拶回りが終わってから、そんな態度が日ごとにあからさまになって行くのに、ちょっと唾然としていた私。せめて夫から優しい言葉でも掛けられれば何とかなっていたけれど、実際には当然だと言わんばかりに何の言葉もない。どころか、そんなことに気づく様子もない。

外から見ていたのと違う生活が始まってしばらくして見回すと、案外大きな家なのに驚かされる。表通りからは創造もつかないけれど、家は裏通りまで突き抜けている。真ん中には、銭屋五兵衛ゆかりと伝えられる大きな蔵があって、その前に大きな庭が広がっているんや。

街の中心も中心、尾張町のど真ん中にこんなに広い庭があるなんて！嘘じゃない。柿の木を始めにいろんな木があるし、鳥や虫もいっぱい。でも、何だか実がなれば、どれも食べられるものばかりみたい。

そんな庭の一角に平屋建ての棟があって、仕事の合間の短い時間、みんなはそこでご飯を食べていた。一動作ごとに、あれが足りないこれが分かってないと文句は降ってくるけど、街の中で思わぬ自然に囲まれていると、不思議とところが和らいで来る。思いも掛けないことが、こんなにも小さな楽しみを生み出すのかしら。

しばらくして子供達が生まれると、ここに二階建ての棟を作り、庭を半分にしたのはちょっと惜しかった。けれど子供達には落ち着ける場所が出来たし、何より、庭だって無くなったわけでないし。新しい二階建てからは、両方に庭を眺め

られるようになったことで、また違った楽しみを持つことが出来るようになったけど。



してあげる職人さんに、させてもらう気持ちで

商いはお客様のためになるものを用意して喜んでもらえるようにするもの。自分ではない、お客様が第一。次にお客様のためのものを作る職人さんが大事。そやさかい、職人さんが仕事し易いように、準備をしてあげんといかん。掃除はもちろん、ミシンなどの道具もきちんと磨かんといかん。すぐ縫いものが出来るように、布に皺癖がつかないように広げたり、整理して置いたり、防水の桐油や穴

あけ用のポンチやハトメの用意をすることを忘れたらあかんよ。

あんたは、職人さんのように縫うことが出来んのやさかい、それくらいのことくらいしてあげるのは当たり前やろ。さっさと準備しまっし、もたもたせんと。

後ろからせつつかれるようにして言われるまでもなく、朝早くの限られた時間の中では自然と体の動きも速くなる。逆に近くでいろいろ言われるとかえって能率が落ちてしまうから、どこか見回しても見えない処に行ってもらおうとありがたいんやけど。ちょっときつすぎるかしら。

文句を言われても、悔しいことに本当のことやし。手に職のない私ができるのは、職人さんが仕事をし易いようにしてあげるだけ。それも、“してあげる”という高飛車な気持ではろくなことが出来ない。やっぱり、一步下がって“させてもらう”気持を持たないかんみたい。

考えてみれば、普通にお勤めしていれば、まずこんな機会はないのだし。文句を言えばキリがないけど、人は皆んな、それぞれの与えられた場があるもの。自分で好きで選んだ訳でもないのに、ともすれば自分だけが恵まれない！と思いついてしまうのはもったいないというか。もう一言突っ込めば、「可哀想」になる。

やっぱり、目の前しか見えないから……見えない人が多いからかしら。

お客様のため人様のためっていうけど、私のためがない寂しさ

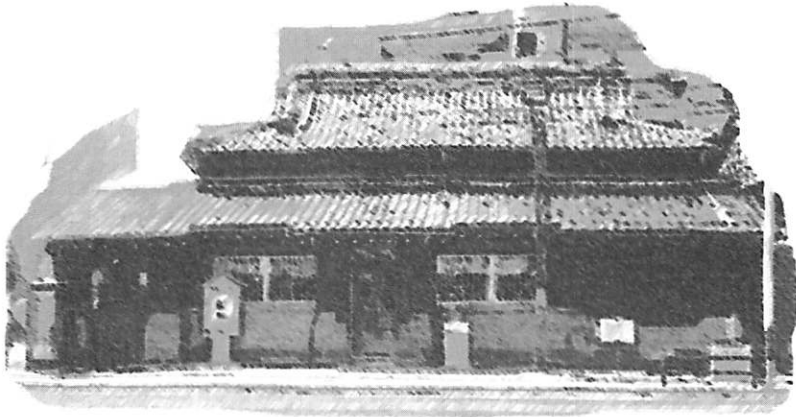
ある時、向かいの銀行からなかなか道を渡ってこれんかったら、「何をぐずぐずしとる！」と、怒られてしもうて。

つい私も、「そんなに慌てて渡って事故にでも合ったらどうするの」と怒ったら、その返事がなんと、

「お前より、お金の方が大事や」

あまりのことに気が動転して、しばらく何も話せなんだのを覚えている。

あれは何んだつたんだろう。道を渡り終えると、当然のようにお金を受け取ってお終い。特別に言葉を掛けられた覚えもない。さっさと店に入ってしまう。私の必死の苦勞をあんまし評価してくれないみたいなのは、ちょっと鼻白む思い。家族は、仕事のための道具にしか思っていないの。



そんな一見冷たく見えるのに、店先ではお客様のために、人様のために、大きな声を上げている。誰かに頼まれると、今すぐ仕事に関係がなくなっても足腰軽く動いている。内弁慶という言葉があるけど、あの人の場合は“外弁慶”なんかね。

でも仕事のツボはきっちり押さえているみたいで、仕入れの間屋さんが来ると、まず最初にお金を支払って、領収書を書いてもらってから話をしている。どうせ払わなければいけないお金を、しぶしぶ後から出すなんて愚の骨頂。最初に払った方がどんだけ気持ちが良いかしれん。それに支払いが良ければ、仕入れも安くなるし、何かある時でも品物は入る。終戦後の物の無い時代に、あちこちから必死に買いあさって商売をしていた頃の辛さを身に沁みて感じているからこそこの考えなのだと思う。ただ、その分、家族を無視されてはたまらない。少しは考え

てよ。と思いながら商売を手伝っている間に、これは私らを空気のように、あって当然やけど、無くなったらたちまち窒息して死んでしまうように考えていることが分かるようになった。

仕事が一段落している時期になると、時々海外旅行に連れて行ってくれたりしたのがその証なんやけど……。結局、いつになっても「お前のために」という言葉を出さないのは寂しい。やっばし、大正の人は皆んなそうなのかしら。

給料は神棚に、仏壇の拭き掃除は毎日

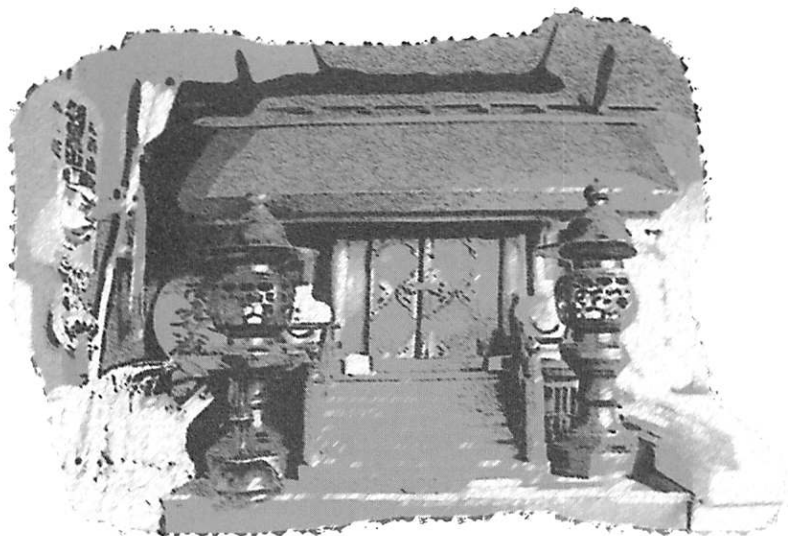
月末近くの給料日になると、お父さんは朝から皆んなの給金を計算して、私と一緒に袋詰めする。お陰様で今月も上手くいった、これも神仏の御加護の賜物と思う気持かしら。皆んなに手渡すまでの間、神棚にしばらく捧げて置くのが習わしみたい。

最近では銀行振込みが当たり前のようになっているけれど、やっぱり実際に給金のお金の束を受け渡す方が、渡す方ももらう方も実感が湧いて来る。人数が何百人の会社ならいざ知らず、見回せば皆んなの顔が見える店で、いくら合理的といってもそんなことはしたくない。「今月もありがとう」の気持ちを込められるのは手渡ししかないと思う。

お金は、それを使う人がいてこそ価値が出るもの。仕事は、それをするもので使ってもらう人がいてこそ値が出るもの。人様のためにお役に立つことが大事なので、最初から自分の都合ばかりの最近の人の言い分は、ちょっと……。何か、合理主義とか、自由とかいう言葉を履き違えているとしか思えない。

最初にあって、一番大事なのは、「感謝」の気持ち。「お陰様で」と思える気持ちのはず。何んで、そんな簡単なことを忘れてるんやろ。このままでは、日本が駄目になってしまうんじゃないかとすら大仰に感じるのは私だけかしら。

だから、寒い冬の朝なんかは辛いけど、感謝の気持ち……。お陰様でと、ころの中で繰り返すと仏壇の拭き掃除も楽になる。ひやっと冷たい手触りが、逆に気持ちを引き締める。ご先祖様がいてこそ、今日の私たちがあるんやし。「ありがとうございます」と感謝の気持ちが湧いて来る。



子供達にも、感謝の気持ちをいつも持って欲しいと思う。別に仏壇の前で手を合わせて座れとは言わないけど、こころの中で頭を下げてもらえればそれで充分。いつか代が変われば、次の世代が私に変わって毎日の拭き掃除も自然にしてくれるはず。後は月日の移り変わりを自然のままに待つだけ。

店と家、それに蔵を駆け回る掃除

それにしても、ここの店はなんて広いんやろ。お客様をお迎えし、職人さんに良い仕事をしてもらうために毎日の掃除は欠かせないんやけど、尾張町の大通りから裏手の新町通りまで、何軒かの家をつなぎ合わせたもんで、まるで広い。仕事場の一階から二階へと順に掃除し終わると、また一階に下りて次の二階へ上がる。途中に中庭が三つもあるし、蔵まであるんや。蔵は、あえて倉といわんみたい。倉は、昔戦争の武器を入れたことに由来するらしいので、あまり使いたがらない字だと教えられた。蔵の方の字は、仏教の経典や宝物を入れるところからの由来なので、商売を生み出す宝の蔵というように考えているんだとか。

商売を単純に見ると、物を仕入れて、それ以上に売ることによって利幅を得ることになる。それは形であって、“お客様のために役立つように”という心が入っていないと長続きしないもんやと、里の親にも教えられていた。けど嫁に来て、娘時代と違って自分が第一線に立ってみると、今まで何となく聞いていたことが、急に意味を持って来る。

そんなこんやで駆けずり回っていると、「奥さんの姉さんタスキは似合うね」と言われ、思わず自分の姿を見直す。考えてみれば、何となく着物を着ていた気がする。洋服やとスースー空気が入るみたいで落ち着かないので、どうしても気持が落ち着く着物になってしまうんや。特別に高いのじゃないから気にしてなかったけど、やっぱり珍しいのかしら。

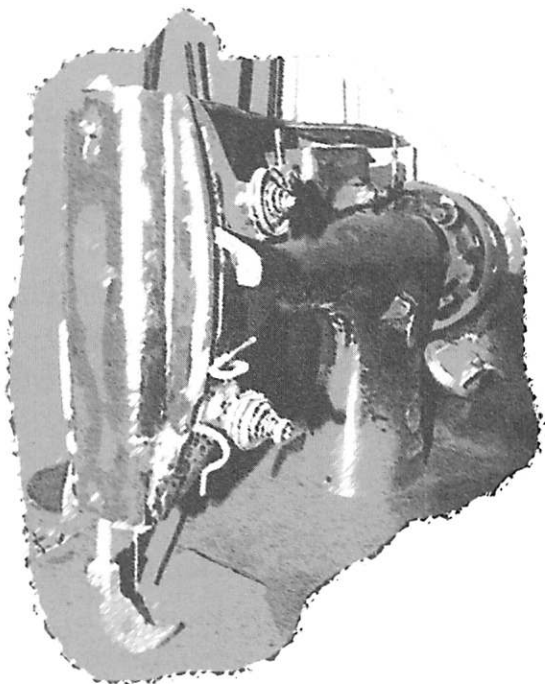
職人さんのこだわり

職人さんって、どこでもそうなのかしら。お店のことなんかとは全然違う世界に、自分だけで生きているようなところがあるみたい。

周りのことを気にせず、というかそんなこととは違う世界に自分を置き、「ただひたすら“いいものを作る”のに脇目もふらず、一心不乱に作ることに専念する」ことを貫いている。端から見ると、男らしい、頼もしい、と感じることもあるけど、何かすごく怖い気もする。下手に話しかけたりすれば、とんでもない言

葉が跳ね返ってくるような。良く言えば、職人さんの聖域に浸っているような
でも。

店の若い子たちを見ていると、私と同じようにおっかなびつくり職人さんの
周りにいるけど、目は一所懸命に職人さんの仕事を見ている。そんな風に見られ
ていることにお構いなしに職人さんは仕事を続け、「甲斐性があるなら、俺の技
術を盗んでみろ！」とでも言いたげにもくもくと仕事の手を休めない。



「ああ、職人さんって人に仕事を教えるもんやないんや。仕事というか技術を
盗ませているんや」下手に教えると甘えてしまうから、厳しくすることでほんま
もんの職人を見定めているから、あんなつつけんどんな態度になっているんか。
変に横やりを入れることも忘れて、離れて見ているだけ。

でも、今の時代。少しは若い人に対して、手取り足取り具体的に説明して教え

てあげて欲しい、と思うのは私だけでないはず。まあ、内心、教え方を知らないのかもしれないけど。それならそれで、何が分からない！と、聞いてあげたらよっぽど良いのやけど。気恥ずかしいのかしら。

人様へのお世話の中から

亡くなったお舅さんもお姑さんも、皆んな人様のお世話をマメにしていた。お父さんも同じで、もしかしたら趣味でないかしら、と思うほど。そういえば息子も、何やらチョコマカと世話して、近ごろでは尾張町の町の歴史を本にまとめたり、ラジオに出てまで何んやら喋っている。

あないにしている、普通やったら仕事は大丈夫かしらと思うんやけど、仕事を前に出さないお世話は、いつの間にか回り巡って店のことに関係して来るようやから不思議や。自分のことばかりしている人より、人様のことを第一に考えて動いている人のことは、ちゃんと神様が見ているんやろかね。

もしかしたら、これが私らのような日本人らしい商売の仕方なのかもしれない。お役人や、一握りの大きな会社の人とは別として、血の通った人の中で商いをするんやったら、そんな杓子定規(しゃくしじょうぎ)のように型にはまった付き合いが出来るとは思えない。毎日の挨拶を始め、いろんな話を聞いてあげている中から、いつの間にか仕事が回って来る。それを待たられないとか、面倒くさいとか、効率が悪い、とかいくらでも悪口は言える。でも私らは機械人形(ロボットか)じゃないし、電気リレーのように順番通りに動ける訳でない。どんなに効率が悪くても、暖かい血が通う方がどんだけかまし。

やっぱり、一番大事なのは形でなく、中身の「気持」なんやね。

謝ることのない夫

大正の頃の人たちは皆んなそうなのかしら、「儂が儂が...」とかなることが当然の用に振る舞い、その実、何か都合の悪いことがあっても決して謝らない。それどころか、悪いのはお前だとか、責任を勝手に転嫁してしまい、つまるところ自分が絶対的に正しいと言い張る癖があるみたい。

若いうちはそれで周囲も私も、まあ仕様がなくて眺めているんだけど、歳をとっても一向に改善されない。それどころか、意地汚い性癖のように振る舞い出すので周り中が困ってしまう。「もう、いいかげんにして」と言い出したくなる。それどころか、こちらが疲れて来てしまう。



そりゃ、あの大変な戦争を生き抜いて来た甲斐性はすごいと思うけど、それだけが錦の御旗になってしまっているんじゃないかしら。「俺はこれだけのことをして来たんだからお前たちも……」という態度に出られたら、せっかくのこれ

までの生き様が台無しになってしまう。そういうことは自分の心の中に終い、無言の行動というか後ろ姿で見せてくれる方が、よっぽど格好良いのに。確かに誰にでも出来ることでないのは分かるけれど、表現方法をもう少し考えて。

つい自慢になり、自分が一番と思う気持ちが形になって表に現れると、人に対して謝るという謙虚さが薄れて来る。自分は神様のような万能ではないのだから、良いところもあれば悪いところもある。誇るべきところと、謝るべきところをわきまえてもらいたい。「女、子供に何が分かる、僕は、俺は……」というのは、やっぱりちょっと。そんな自分の態度を一度、鏡で見たらどうやら。そういう私らだって、決して完全でないのはわきまえているんだから。

残念なことに、結婚してからこの方、謝るのを見たことがなかったっけ。一度、お姑さんが亡くなった後に、それらしき言葉はあったようやけど。二人とも、もう若くないんやし。子供や孫に囲まれ、やがて曾孫も見れるかも知れない歳になっていることを思っして下さい。ねえ、お父さん。と、ここで呼びかけると、大正生まれの頑固さの中に、はにかんだ優しさが見え隠れするよう。

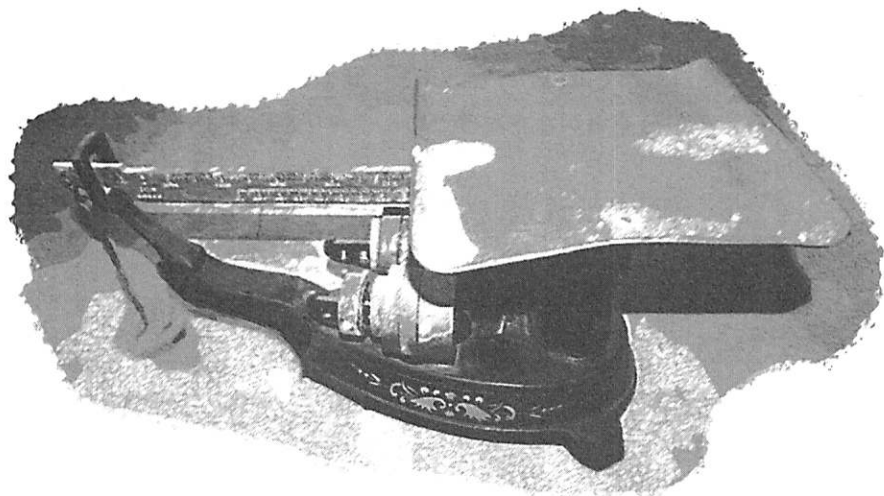
孫の帰る日

考えてみれば、この家というかこの店は、家族みんなが力を合わせている。初めて嫁いで来た時も、お舅さんとお姑さんはもちろん働き者やったけど、そこにお舅さんの弟さんも一緒になって動いていた。商売は皆んなでやるもの、人様を当てるのは自分がやることをやってからのこと。自分が何もしなくて、人様を当てるにしたら、言うことを聞いてくれる訳がない。

という気概があったもんで、家中がじっとしていない。お舅さんやからといって座っているんでなくて、手足を動かしている。旦那さんだからといって、顎で人様を使う前に体を動かしている。ましてお姑さんともなれば、目の前に見えるようなことはなくて、もう、あっちこっち飛び回っていて、目にも止まらないような動きをしている。

「私だって……」朝早くから、実家の豆腐屋を手伝って体を動かして来たんやから、そんなことに負けてられない。という具合だもんで、暖かくなる床がない、

家中の床がじっとしている家族がいないから冷やっこいまま。そうして、体を動かすことを先に行っているもんで、まして余分な話をしている余裕がないから、これだけ大所帯なのにびっくりするほどに静か。



何が楽しくって仕事をするんやろ。それとも仕事が趣味なのかしら。と思ってみたりもするけど、そっと伺う皆んなの顔は何故か生き生きとしている。

そうこうする内に修行に大阪へ行っていた長男も帰り、仕事に加わり出した。商売屋だから特別に良い学校へということよりも、親元を離れた生活を(たまたま東京だったけど)させることと、他人の飯を食べて見させたいと思っていたけど、大学4年間と社会体験5年はさすがに待ち遠しかった。しばらくして入って来た二男は技術屋なのに比べ、長男は特別なものは持たず目立たないけど、広い体験と柔軟な考え方と、何より店を継ぐことの意味と意識をしっかりと持ってい

ることが嬉しかった。趣味で古い歴史や文化芸能に目を向けている一方、コンピューターやインターネットとかをいち早く、それも役所やNTTや電波監理局(今の総合通信局)をも巻き込んで行動するし。何より、人様のお世話をすることを第一にする姿勢は夫と同じなのには、やっぱり親子と思わされてしまう。

嫁も、同じ商売屋の人形問屋の長女に縁があり、気心の知れた商売人同志やったけど、もう昔のような嫁姑のような時代ではないと思うて、生活は別にさせるようにした。いうてみれば、姑さんにされた仕打ちを、そのまま息子の嫁にするのは時代が違うからと考えたのやけど。ふと、損な立場やったのかなあ、自分がされたことを持って行く場がなくなってしもうたし。ちょっと拍子抜けしてしまったみたい。

とはいえ、二人の男の孫に恵まれた。いつの間にか世代も進み、その孫がそろそろ店に帰り出して来た。二男はちょっと早く、大学を卒業してしばらくしてから長男にたつての願いと言われて帰って来た。そして、長男は6年間、東京へ修行に行っていたのが、この春に自分から帰ると言っただけで帰って来た。もう、私らは年も年やし静かに店を見守るだけになり始めてるけど、孫たちからは「続けるだけが本当に良いの！」と鋭い言葉をいわれる中、やっぱり続けて来たことに悔いはないし、これからも続けて行って欲しい。と、思うだけ。

孫を見守り

新しい世代は新しい感覚で、人から(例え親や一族であろうとも)言われたことを押しつけられることには反発もする。大業(たいぎょう)に言えば、自分らしさというか権利を掲げている。別に望んで商売屋に生まれて来たのでもないのに、たまたま商売屋の子供というだけで、自分の好きな人生が歩めない。これしかない!と、決めつけられては自分の人生でなくなってしまう。もっと自由に人生を生きたいし、単に続けるためだけに店の仕事を背負わさせられるのではたまたまものでない。親や先祖の都合で犠牲にさせられるのは嫌だ!

この言い分は、何世代続いていることやろう。あの商売の固まりのような夫ですらも言っていた覚えがあるし、孫たちが非難している長男も、また早く亡く



なった二男も言っていた気がする。特に長男は表だって言わない分、余計にずっと悩み続けていたことなのだろう。時折、妙に遠慮しすぎているようにさえも感じられる。

「あんた方どこさ」→「尾張町さ」

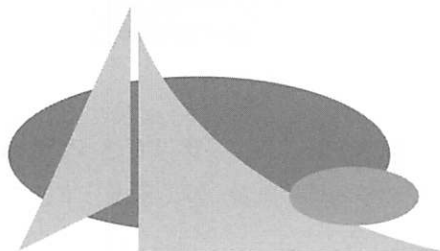
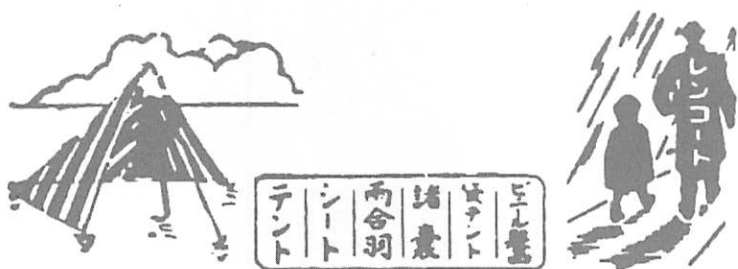
「尾張町どこさ」→「商売屋さ」

「商売屋どこさ」→「石野テントさ」

替え歌をつぶやきながら、自由に仕事を選べる一般の人と、生まれながらに商売を背負う私らと、どちらが幸せなのか考えて来る。でも、商売屋に生まれたからには、信じるこの道が一番正しいという、こころのずっと奥にある直感が教え

てくれる。

ふっと見ると、一番目の孫はインターネットで商売を始めているし、二番目の孫は現場を仕切り出している。案ずるよりも易しか。そうした姿勢を見ながら、仕事している時と、仕事が終わってからが同じ態度なのに気づかされ、何気ないことの中に大事なことを発見した思いがする。だってお勤めの人の中には、仕事中はどんなに良くても、仕事が終わったら何もしない……. 仕事先の人への挨拶すらもしないのを見かける。やっばし、いつの間にか、親や私らを見てるんやね。目頭が熱くなって来るようや。



石野静子・媼(おうな)について

昭和三年十月三日生。瓢箪町の老舗豆腐店の八人兄妹の一人娘として育ち、昭和二十二年二月二十二日の二並びの日に18歳で尾張町に嫁ぐ。明治の姑・大正の夫の下、店の住み込みの男女をも采配しながら多くの体験をしつつ、商家の媼として遅しく店を支える。

あとがき

実はこの本は、19年前に書いたものの続編なのです。それも世代を超えたものなのですが、尾張町を支えた女たちのころ粋は連綿と続いていることが感じられるのではないかと思います。

あの頃から時代は大きく変わり、厳しい経済環境の中で生涯雇用ということすら根底から見直されるようになっていきます。世界的恐慌の名を借りて、人員整理が堂々に行われるようになってしまった昨今。能力主義と合理化の中で、安閑と定職に留まっていることも難しくなり、明日が見えにくくなっているのが現状です。人情よりも経済効率が優先される傾向は一層強まり、規模で商売する大型ショッピングセンターが日本全国至る所に出店されて来ています。

アメリカの超大型ショッピングセンター・ウォルマートのように、出店した後には草一本残さないような徹底した戦略をとり、低価格を売り物に商売を続けています。そして万一、経済的効率化が思うようにならなかった場合は、あっさりと店舗を閉めるのですが、閉められた地域は店一軒も残っていないためにゴーストタウン化してしまうとされています。そのために各地でウォルマート出店に反対する動きすら出ているとか。

日本も、大手の一握りの大型店が地域の花のように出店し、経済効率が悪くなるとさっさと撤退してしまい、後には何も残さなくなり、周辺地域の人が困ってしまうケースが見受けられるようになっていきます。いわば大きな打ち上げ花火を見ているうちは良いものの、花火が終わると前よりも一層暗くなる、との状況に良く似ています。

その時は格好良く振る舞っても、自分にとって都合が悪くなると後は知らない。合理的と言ってしまうえばそうなのですが、対象とされている消費者は、暖かく血の通っている人間であり、単に論理だけで処理できるような単純な存在ではありません。例え、表面を論理だけで繕っても、中身が伴わなければたちまち綻びてしまう。

一番大事なものは、見えるところだけでなく、見えないところにも正直な心配り

をすることによっていつまでも続く信用を創りあげることなのかもしれません。建前だけでない、本音で創り上げたものならば、どんな時代にも通じるものがあるに違いない。信じること、信ずるところを変わらずに持ち続けること、その時そのときの都合に迎合することなく信じる道を自分なりの早さで歩むことが、つい忘れがちであっても続けるべきことなのかも知れない。

言葉に書くと簡単のように思われるけれども、実行は大変なことです。ギネスブックを見ていたら、世界最古の老舗の一位と二位が日本にあると記されていました。大阪の金剛組という建設屋が聖徳太子に招かれてから続いているとか、また石川県の粟津温泉の法師旅館が弘法大師によって開かれたとか。

本当は人様はどうでも良いのです。だってそれは自分ではなく、棚に飾った「食べられない“ぼた餅”」と同じなのですから。大切なのは、「今」を大事にしている自分なのです。お陰様でこの春、石野テントは創業百周年を迎えることが出来ました。これもお客様が支えてくれたこととたゆまぬ努力のお陰と思っています。この「感謝」の気持こそが、時代や立場を超えて大事なのではないかと、今更ながら感じています。

〈さし絵の説明〉

項	目	内	容
○表紙			「石野テントのハンテン」
<目次>			
○明治の姑、大正の夫、昭和の嫁の立場			「電車」
○街の中なのに広い庭があり～			「中庭」
○お客様のため人様のためっていうけど～			「旧北陸銀行町民文化館」
○給料は神棚に、仏壇の拭き掃除は毎日			「神棚」
○職人さんのこだわり			「古いミシン」
○謝ることのない夫			「ちょうちん」
○孫の帰る日			「桐油用のはかり」
○孫を見守り			「紙合羽出来品の看板」
			「石野テント旧新のマーク」

発 行=2009年 6 月吉日

著 者=石野 琇一

さし絵=石野 琇一

発行所=金沢市尾張町 1 丁目11番 8 号

尾張町商店街振興組合

尾張町若手会